

隠岐島前高校郷土部収録

海士町の民話から (7)

■再話・解説

酒井董美 ただよし(現在、出雲かんべの里館長。
元隠岐島前高校郷土部顧問)

平 林

語り手：石原 サイさん (北分 明治27年生)

昔、侍屋敷に大将と小使がおつたそうです。あるとき、その大将が手紙を書いて、宛書きに「平林」として、小使に、「これを持って、平林(ひらばやし)へ行つてこい」と使いに出されました。小使はまだ字を知りませんでした。

ところが、小使は途中で「平林」という字の読み方を忘れてしまったので、出会った人に見せると、「これはヘイリンと書いてある」。

「さあ、大将が言われたのは、ヘイリンだなかったようだがなあ」と思いながら歩いて行き、また先で人に聞いたところが、「これはイチハチジュウノボクボク(一八十の木木)って書いてある」。

それから、それも違うような気がして、また先で聞いたら、「これはなあ、イハイとイハイとイと書いてある」。

やはり、大将が言われたのと違うような気がして、そのまま持って帰ったら、大将は、「おまえは字を知らんから、つまらないなあ。これはヒラバヤシだ」と言われました。小使は、「あつ、そうですか」と答えました。大将も、「学問を教えなければならん」と思われ、小使もまた学問をしたということがありました。(昭和52年5月6日収録)

■聞き手……上谷千代美、宇野多恵子、吉本千恵子、酒井董美

【解説】 笑話に属するものである。まず関敬吾『日本昔話大成』でその戸籍を見てみると「1、愚人譚」の中の「D 愚かな男」に次のように分類されている。

423 平 林

愚か者が「平林」という家に使用する。読み方がわからず、「へいりんか、一八十も木木か」といつてたずねる。

同じ漢字でも、角度を変えて読めばいろいろな読み方が出来る。そのようなおもしろさを狙った昔話である。海士町の話では、読み方を知らなかった小使も、大将の情けで学問をしたと語られているが、他の地方では、単にいろいろな読み方があるという点だけが強調されているようである。



■絵：福本隆男 (崎出身、三郷市在住イラストレーター)